

校長室だより

No. 20

平成29年9月22日(金)

強く やさしく

六ツ美中部小学校校長

か とう よし かず
加 藤 嘉 一

子供の不思議な力 ー子供同士で伝わることー

先日、ソフトボール部に行くと、引退した6年生の子供たちが練習に参加していました。4・5年生の指導役で来てくれていました。



【ソフト部の練習風景 6年生と4年生】

「三角形作って！（手本を示しながら）こういうふう。グローブが前で、足がこう。もっと腰降ろして。お尻、お尻。」

「手が違う。もっとうで、ここを地面につけて。」

「速い球は、反対の手でこうやって押さえて。」

言葉としては、自分たちが教えられてきた言葉を使って教えているのだろうと思います。ただ見ていると、わたしたち大人が指導者として伝えるだろう何割かの伝え方と時間で、子供たちができるようになっていると感じました。

大人は時に子供のわからない言葉を使っていたり、逆に意識しすぎて幼すぎる言葉を使っていたりすることがあり、子供の顔がくもってくることがあります。

（高学年だとわかったふりをして付き合ってくれたり、余分なことを言うと叱られると思って黙っていたりすることもあります）大人は説明が多く、子供が嫌になることもしばしば。また、こちらは一生懸命説明しているのに子供がなかなかうまくできないと、「何回言ったらわかるの。」と、いらいらすることも。

遊びのなかで、鉄棒やドッジボール、草笛の吹き方や折り紙など、子供同士は子供独特の不思議な言葉やかかわりあい、コツをつかんでいく姿をよく見かけます。何かのコツをつかむときというのは、その子なりにヒットする言葉や体感するものがあるのでしょう。その子の、それまでの経験が左右することも多いのではないかと思います。

実は授業場面でもよくあります。国語でも教科書の内容を読み取っているとき

に、「それって、この間〇〇がやっていたことと同じじゃない?」「〇〇の店にもあったポスターもそうになっていたよ」という言葉から状況がさっと理解されていったり、算数の難しい説明場面では、子供が子供の言葉で言い換えると「あ、そういうことね」と納得していったりする場面を、わたしたちは数多く見てきています。先生が100回説明するより、子供の一言でさっと伝わるものが多くあるのです。子供から、こういう言葉を引き出すことのうまい先生がよくいます。

子供の言葉の力、子供同士が作る雰囲気の中でのコミュニケーションの仕方に驚くことがしばしばあります。小さい子ほど、未熟な言葉で通じ合うものがあります。子供と接する時間が多い人ほど、このことに気付くのではないのでしょうか。

小学校陸上大会中止決定の後で

台風18号が接近し、16日(土)に行われる予定であった小学校陸上大会が中止となりました。夏休みからがんばってきた陸上部の子たちの気持ちを思うと残念でした。大会主催者も苦渋の決断で



あったことを推察します。朝6時ごろに中止決定の連絡を学校で受け、そのことをメールで配信するときに、陸上部を指導してくれた教頭先生、陸上部の先生方は、「子供たちに、なんとか努力してきたことの区切りをつけてあげたいので、集合をかけましょう」と申し出てくれました。雨の場合も集合する予定であったことと、幸い6時ごろの中部小運動場は、まだ雨も降っていませんでしたので、「できるところまでになるかもしれないけれど、急ぎよ記録会を行い、記念写真を撮ろう」ということになりました。

本番とできるだけ同じ運営・競技の仕方で行いました。朝一番の計測でしたが、なんと半数以上の子供が自己ベスト記録を出しました。練習の成果は



しっかり表れていました。

一人一人の競技中に、一生懸命応援する子供たちの姿は、中部小の陸上部での絆を強く感じさせるものでした。感動的でした。